

日本におけるマクルーハン像の変遷と再検証

上沼 菜穂

本やテレビなどのメディアの違いに言及した研究者として、マクルーハンが知られている。このマクルーハンは、「メディアはメッセージである」と主張し、様々なメディアを「ホット」と「クール」に分類した。この「ホット」とは、利用者が関わることを許さない一方通行なメディアのことを指し、「クール」とは利用者が自分から関わることのできる双方向なメディアであるとした。この分類のもと、印刷された本は視覚優位の偏った「ホット」なメディアとし、「クール」なメディアに分類したテレビが聴覚を復権させるとし、推奨した。また、テレビによって世界は一つの村「グローバル・ヴィレッジ」になるとした。このような主張から、マクルーハンはテレビを擁護していたとされている。

こうしたマクルーハンの理論は、「主にジャーナリストからもてはやされ、一瞬のブームとして過ぎ去った」と言われている。また近年の研究では、「本人はあまりテレビを見ず、テレビが好きではなかった」などの指摘もある。しかし多くの先行文献では、それらが示唆されているだけで具体的な論拠は示されていない。そこでこれらを検証するため、日本におけるマクルーハン研究をまとめた上で、マクルーハン文献の検討を行った。

まず、マクルーハン研究の論文・図書を年代ごとに検証していく。論文および図書は、ブーム期とされている1967年から1970年に多く発表されている。しかし90年代以降、再びマクルーハンを扱う論文・図書が増え、ブーム期よりもむしろ増えている。さらにジャーナリスティックなものだけでなく多様な雑誌で取り上げられ、図書も一人の著者でなく様々な著者が取り扱っている。

次に、マクルーハン自身の文献をもとに検証を行った。まず邦訳もされている『メディア論』では、「テレビの映像を映画のレベルまで高めることができれば、もはやそれはテレビではない」と述べてられている。これにより、彼はテレビというメディアそのものが絶対的だと考えていたわけではなく、あくまで「低明細度なメディア」であるからテレビを推奨していたことが分かる。また、『Understanding Me』に掲載されたインタビューでは、「テレビはめったに見ない」と答えている。『Maclean's』のインタビューでは、テレビそれ自体はとても汚染されていると、テレビを批判するようなことまで言っている。

以上のことから、実際にブームがあり、それが過ぎ去って見向きもされない時代があったことが数値で証明された。さらに、1990年代以降再び注目され、様々な観点から研究されていることが分かった。またマクルーハンは生涯、テレビを電気メディアとして推奨していたが、絶対視していたわけではないことは、示唆的に示された事柄を確認できる記述やインタビューなどがあることが分かった。このように、これまでの日本におけるマクルーハン研究をまとめ、これからのマクルーハン研究に役立つ情報を示すことができた。

(指導教員 後藤嘉宏)